

リ領イースター島で24日、巨大な
ラバヌイ国立公園が国連教
科文組織の世界遺産に登録さ
れた。周年を記念する行事が行われた。

島はチリの本土から約3700キロ離れた「絶海の孤島」。島の4割を占める国立公園には、先祖を崇拝する目的で造られた最長20mを超える石像のモアイが約900体残されている。食料危機から部族間の争いに発展したことで17世紀にはモアイの文化が廃れ、祭壇に並んだモアイが倒されたとされるが、モアイを巡る謎は今も多い。

チリ「モアイ像」世界遺産30年

24日はかつての採石場で、記念のプレートがお披露目された。島では内外の関係者が集まり持続可能な観光などを話す会合を26日まで開催。2022年には山火事の影響で多くのモアイが損傷を受けた。ユネスコの地域責任者は「独自の文化的伝統の生きた証拠だ」と保全の重要性を強調した。

島と日本とのつながりは深い。日本のテレビ番組をきっかけにクレーン大手タダノ（高松市）が、倒れていたモアイの修復に協力。同社

ラパヌイ国立公園の世界遺産登録から30年を記念してお披露目されたプレート（中央）＝24日、チリ・イースター島（先住民共同体マウヘヌア提供・時事）

が寄贈したう
旨のクレー
ンが今も島で
活躍。これが
縁となり、今
度は東日本大
震災で甚大な
被害を受けた
宮城県南三陸
町に、現地の
石を使ったモ
アイ像が島に
贈られた。